

第27回中世哲学会大会シンポジウム報告

論題：中世におけるヒューマニズム

—教父時代—

司会 東洋大学 泉 治 典

提題：教父とヒューマニズム

京都大学 水 垣 涉

提題：*παιδεία*・humanitas と中世ヒューマニズム

筑波大学 野 町 啓

(1978.11.12 於 慶応義塾大学)

司会 泉 治 典

中世哲学会でヒューマニズムの問題が取り上げられたことは、これまであまりなかったように思う。顧みると61年の九州大学で持たれた大会において、故長沢信寿教授が「アウグスティヌスの哲学とヒューマニズムの問題」と題して公開講演をなされ、これは翌年の『中世思想研究』5号に掲載された。長沢教授は愛(caritas)こそが人間を人間たらしめる原理であることを指示して、愛のヒューマニズムを実践的にも強調されたのであるが、このことは同教授を知る者にとっては今なお耳朶にひびく想いを禁じ得ない。同教授はさらに67年のモントリオールでの国際中世哲学会に参加され、その報告を10号に寄せておられる。その時の統一テーマは‘Arts libéraux et philosophie au moyen âge’であって、69年にこのタイトルでアクトが出版された。

今回我々の間でヒューマニズムが討議され、かつ問題を根本から明らかにするために教父時代から始めることができたのは大変悦ばしいことであった。水垣氏はハルナックの言う教父における哲学と神学の平行性というテーゼを仮説的にかかげ、

新約からユスティニアヌスに至る時期を四つに区分しつつ、とりわけオリゲネスの学統と修道制の展開を追う中で、このアンビバレンツを徹底的に明らかにされた。氏はイェーガーの言う‘formatio transformationis’というヒューマニズムの規定を一応採用しつつも、4世紀に入ってパイディアへの中立的態度が積極的態度に変わったとするイェーガー説は認めず、‘Acta Philippi’の一節の読みを拡大解釈として斥けるなど、論述は精微をきわめた。他方野町氏は、先のモンリオールのアクトに記録されているジルソンとクリバンスキーとの対論を取り上げ、中世のヒューマニズムを‘artes liberales’の展開に即して考察する可能性を残しつつも、なお人文主義としてのフマニタスが中世哲学にとって十分な意味でのパラダイムたり得るか、という問いを正面から提出された。

恐らくこの号に記載される以上に詳細に展開された両氏の提題を細部にわたって報告し得ないことは残念であるが、両氏によって共通に解明されたことは、‘中世’におけるヒューマニズムの独自性は何かという問題であった。それは決して古代のパイディアに直接連続はせず、ギリシア的宗教性を断ち切った所で起こる sanctitas と sapientia の（水垣氏）、あるいは sanctus, divinus と saecularis の（野町氏）アンビバレンツに求められるのである。先のジルソンとクリバンスキーの対論の中では、ヒューマニズムとフマニタスとの相違が前面に現れたが、両氏の提題は何よりもまず歴史的諸事実の十分な検討にそくして‘中世’の独自性を明らかにせんと意図するものであった。

そこで質疑の中では、1) 古代における宗教的なエンキクリオス・パイディアと教父のリトゥルギアとの関係はどうか、2) キリスト教の自己形成としての教父のヒューマニズムの中には、後のフランチェスコに見られるような他者理解、他者愛としてのヒューマニズムは見出されるか、3) 西方教会におけるヒューマニズムの形成と東方教会におけるそれとの相違は何に由来するか、4) ヒューマニズムを個人の主張としてよりもむしろ精神的文化的状況として把え得るとすればその視点は何か、等の問題が豊富に提出された。すなわち、歴史的枠が明らかにされた所でもう一度その内実がはげしく問われるのであるが、ともかく今回のシンポジウムにおいて教父時代を取り上げることにより、少なくともその一方の極が明確に提示されたことは大きな収穫である。また両氏が示すパイディアと反パイディアのアン

ビバレンツが、単なる歴史的現象につきるものでないことは言うまでもない。最後に、上記の3)に関して重要な論考を寄せられた山村教授に厚く御礼申し上げる。

提題 教父とヒューマニズム

水 垣 渉

1 主題の時代的範囲と問題の所在を指示するために、オリゲネスからユスチニアヌスにいたる時代の神学と哲学の歴史における「平行性」(A.ハルナック)を手掛りにしたい。ユスチニアヌス帝がアカデメイアの閉鎖を命ずる(529年)と同時に、オリゲネスの学統にアナテマを宣するにいたるまで、キリスト教思想とギリシア思想とは、相互の全き対立と融合という両極のあいだで、複雑多様な仕方に関係した。平行性とは、広い意味での両者の緊張関係と解される。六世紀の前半にこのような緊張関係に転期がもたらされ、両者の関係の古代的伝統に終止符が打たれた。またこの時期には、ボエティウス、ベネディクトゥス、カッシオドルスなど、中世ヒューマニズムに直接連なる人々が現われ、新しい伝統が姿を現わしていることが看取される。二つの伝統が交替するこの時期をもって主題の時代的範囲とすることが許されるであろう。

キリスト教思想とギリシア思想との緊張関係から教父とヒューマニズムの問題を考察しようとするならば、最初の課題は、教父とヒューマニズムとのさまざまな緊張を明らかにすることにあるであろう。以下四つの時期について、緊張の特質という視点から教父とヒューマニズムの問題に照明をあてるのが、本論の意図である。

2 一世紀。新約聖書の時代に、教父とヒューマニズムの問題の基本的な論点が生ずるに提出されている。A. 智恵(*σοφία*)。1 *Cor.* 1, 18-25でパウロはこの世の智恵と神の智恵とを区別しているが、智恵そのものを否定してはいない。このことは「智恵の探求」1 *Cor.* 1, 22; cf. *Act.* 17, 27), 「哲学」(*Col.* 2, 8)にも類比的に妥当する。H. フォン・ゾーデンは原始キリスト教の文化にたいする態度を《urchristliche